

## 子育て支援ルームにおける「プレイストーリー」の試み

### Attempt of the Play Story in child care support room

磯 野 久美子\* 名須川 知 子\*\* 高 畑 芳 美\*  
ISONO Kumiko NASUKAWA Tomoko TAKAHATA Yoshimi

本研究は、文部科学省の特別経費を得て「大学の機能強化としての就学前教育専門職（仮称）養成の高度化と幼小連携を含めた総合的カリキュラム開発」の事業として、就学前教育カリキュラム研究開発室を設立し、0～5歳児の子育て支援に関する実践と研究開発の一部である。この事業の一環である、子育て支援ルーム「GENKi」では、ニュージーランドの視察を通して、ラーニング・ストーリーを用いた学びの記録から、日本の子育て支援ルームでの学びの記録方法の開発を目指した。記録を書くことで、情報を共有することができ、エピソードの背景が浮かび上がり、子どもの成長を時系列でみることが出来た。また、記録の効果として、子育て支援員の記録をつなぐことで、①子どもの「遊びを通した学び」の本質が見え、子ども理解も深まり、子育て支援員の質の向上にもつながる。さらに、②子どもの学びに必要な環境への配慮や工夫が出来るようになった。

キーワード：子育て支援、記録の共有、子ども理解、支援員の質向上、環境への配慮

Key words : child care support, share of record, understanding of the children, improving the quality of support staff, consciousness of environments

#### 1. はじめに

OECDでは、1998年から乳幼児の教育とケアに着手し、拡充と質の改善を目指している。その理由として、女性の社会進出の保障及び乳幼児の発達が人間の学習と発達的基础形成段階に関与しているとみなされているからである。我が国においても、女性の社会進出、核家族化、地域関係の希薄化等、子どもをめぐる環境が激変し、近年の子どもの育ちについては、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、運動能力が低下している、他者とのかわりが苦手である、自制心や規範意識が十分育っていないなどの課題が指摘されている。

また、乳幼児の成長・発達にとって大切な、集団の中で同年齢児あるいは異年齢児と共に育つ体験を十分に得ることが困難な状況となっているほか、保護者の子育てが孤立し、子育てに不安や負担を感じる親が増加しているのが現状である。

これらのことから、乳幼児期に相応しい教育内容だけでなく、親育ても視野に含めた子育ての支援のあり方が必要になってくると考え、平成26～27年度、文部科学省の特別経費を得て「大学の機能強化としての就学前教育専門職（仮称）養成の高度化と幼小連携を含めた総合的カリキュラム開発」の事業に取り組んでいる。また、その一環として、子育て支援ルーム「GENKi」を設置した。

ここでの目的は、①大学と附属学校園の共同体制によ

り0歳児～就学前、さらに小学校までの連携を含めた教育・保育内容の開発、②地域拠点としての子育て支援のあり方の検証、③就園前の乳幼児親子が安心して集える場の提供 ④大学の資源の有効活用による地域貢献、である。

ここでは、ツールとしての記録が重要であると考えられるが、中でもニュージーランドにおける就学前カリキュラムであるテ・ファリキの学びの成果を照合するためのラーニング・ストーリーは、現在もっとも注目されており、ニュージーランドの幼児教育・保育機関だけではなく、保護者が運営するプレイセンターでも運用され、効果をあげている。そのため、現地での活用状況を詳細に調査し、わが国の子育て支援センターでの実施への可能性を探り、本事業における記録を「プレイストーリー」とし、その開発を試みる。

#### 2. ニュージーランドにおける就学前カリキュラム：テ・ファリキとラーニング・ストーリー

ラーニング・ストーリーについて、我が国でも研究が進められているが、橋川（2012）は、「テ・ファリキとラーニング・ストーリーは、保育者と子どもの間主観的關係を物語り、それによって獲得される学びの成果を分析し得る尺度であるとともに、保育者の環境整備と子どもの学び・育ちの質を問い直し、乳幼児期の子どもの健やかな生活を保障する鍵となる」<sup>1)</sup>と、述べている。

\*兵庫教育大学就学前教育カリキュラム研究開発室 特命助教

\*\*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻・幼年教育コース 教授

平成27年10月23日受理

また、「テ・ファリキ」の特色として、大宮（2006）は、「幼児期のカリキュラムの多くが『準備教育としての成果』を求められ、事細かに現場に指示する形で策定されるのとは対照的に、徹底した保育の実践者・専門家の意見を集めて作られた子どもの『今ここにある生活』を大事にする保育観に立つカリキュラムだ」<sup>2)</sup>と、述べている。ただし、こうした研究は、保育の専門機関である保育所、幼稚園については進められているが、子育て支援ルーム等の機関での先行研究は見当たらない。

そこで、「遊びを通した学び」を、より明らかにするものとして高く評価されている、ラーニング・ストーリーの活用状況について現地を調査した<sup>註1)</sup>。

まず、私立保育園の Royal Oak Childcare Centre では、日々のエピソード記録を基にラーニング・ストーリーを作成し、そこでの学びをテ・ファリキの要素と照合することで、子どもの活動を発達にとって有意義なものへと発展させていた。私立幼稚園の The Nest Private Kindergarten では、Emmi Pikler の影響を受けており、環境と養護の面を重要視して学びを捉えている。3か所の保護者が主体として運用するプレイセンター、Hillsborough Playcentre, Eden-Epsom Playcentre, Balmoral Playcentre では、子ども達の探究心を刺激し、居心地の良いコミュニティを作ることに力を入れている。そして、ここでの経験の積み重ねを、母親がポートフォリオにラーニング・ストーリーとして記録している。さらに、テ・ファリキの要素と照合し、子どもの学びに必要な環境を提供していた。Te Kohanga Reo o Kakariki では、マオリ文化継承のため、マオリ語のみで保育が進められており、Te Korowai と呼ばれるカリキュラムを使用し、テ・ファリキは活用されていなかった。

今回の視察において気付いたことは、カリキュラムに示された目標をどのように達成するのかは各施設の裁量に委ねられ、具体的な活動内容や方法は施設ごとに異なっていることであった。それは、このカリキュラムが、子どもの生活の質や意味を問い直し、それぞれの環境の中で子どもの学びの成果を明らかにするという目標を掲げていることから、地域の特性を活かし、施設独自の保育ができるのだと捉えることができる。特に、各プレイセンターでは、親同士が互いの子どものラーニング・ストーリーを記録することで、親育での効果も見ることが出来た。

### 3. 本学子育て支援ルーム「GENKi」の取り組み

本大学の子育て支援ルーム「GENKi」は、2014年10月21日に開室し、利用者は0歳～未就園の乳幼児と保護者を対象としている。2014年度は、火曜日と木曜日の9:00から12:00に開室していたが、近隣地域の子育て支援施設の殆どが、月曜日に休館して利用できないという状

況だったため、2015年度から、月曜日も開室するようにした。

2015年10月21日で1年を迎えた現在、登録数は、359人（男児172人、女児187人）で、4か月から4歳5か月の子どもが利用している。登録時の平均年齢は、1歳2か月である。1日の利用者数の平均は、2014年度は16家族（35人）だったのが、2015年度は22家族（48人）に増加している。また、母親だけでなく、祖父母や父親の利用も見られるようになってきた。

ここでは、ニュージーランド視察において、子どもを肯定的に捉えるという、ラーニング・ストーリーの記録方法を採用し、「GENKi」独自の方法で記録している。この記録方法を、「GENKi プレイストーリー」と名付けた。その記録をスタッフが持ち寄り、週1回のエピソード検討会を開いている。

以下、本ルームでの子どもの変化を記録した、プレイストーリーについて述べる。

#### (1) 目的

子育て支援ルームにおける子どものエピソード記録から、「遊びを通した学び」のプロセスを明らかにする。

#### (2) 方法

調査方法は、毎週金曜日の8時半から10時半まで、3名のスタッフが、各自の記録したエピソードを持ち寄り、エピソード検討会を行う。1つ1つのエピソードを分析し、そこでどのような「学び」があったのかを明らかにするとともに、その要因となる環境（人的・物的）についても考察する。

2014年10月23日から2015年10月15日までに135事例のエピソードを収集した。

「GENKi」では、兵庫県教育委員会発刊の「平成24年度幼稚園教育のあゆみ第45集」に掲載されている「幼児の『学び』の視点」を基に、「学び」を捉えている（図1参照）。「『学び』は知的活動として、とらえがちなものであるが、本県では『学び』には、感性や情緒の基盤という側面も重要であると考え、2つの側面から『学び』を広げ、深める姿をとらえた。」<sup>3)</sup>とあるように、「感じる」「考える」「表す」の3つのポイントで、子どものエピソードを記録していくことで、「遊びを通した学び」のプロセスが浮かび上がってくる。

#### (3) 倫理的配慮

本研究は、子育て支援ルームで実施するため、登録時に保護者から研究への同意書にサインをもらっている。また、事例としてまとめ、公表する際には改めて保護者にそのエピソードを読んでもらい、承諾を得ると共に、個人が特定されることのないよう配慮した。

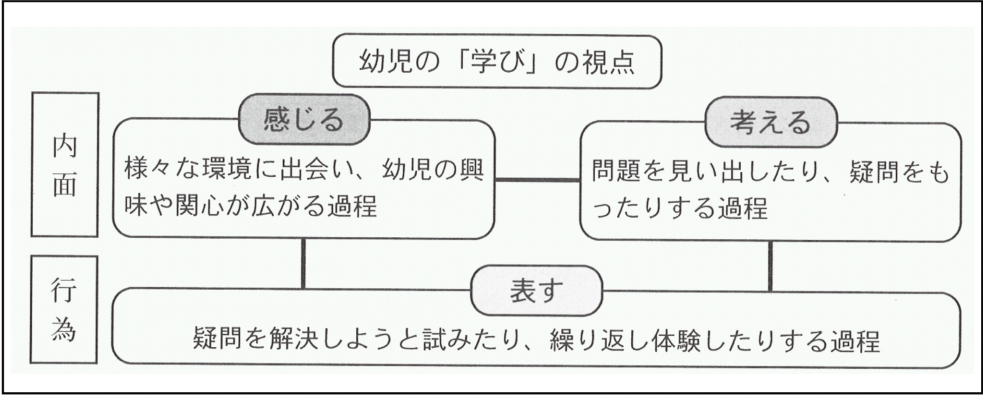


図1：「学び」を捉える視点<sup>3)</sup>

(4) 内容「GENKi」の記録から

① 物を介して変化していく

<エピソード1>

12月X日 「チャレンジ」 Aくん：1歳6か月 記録：スタッフE
Aくんは、バギーに大きな積み木を積み上げて意気揚々と搬送し、スロープを上ったり下りたりしている。そして次は段差を登ることにチャレンジする。 様子を見ていた母親がAくんの後ろから、そっと車輪を上げサポートした。 その結果、段差を克服したAくんは、「やったー！」というような満面の笑顔を周囲のスタッフに向け、スタッフも思わず「すごい！やったねー！」と拍手した。 －振り返り－ Aは、支援ルームの環境に対し、自ら難しい課題を選び挑戦していく。その行動を母親はさりげなくサポートし、達成感をもたらした。

<エピソード2>

12月X日 「ぼくもやってみる！」 Bくん：1歳7か月 記録：スタッフF
「GENKi」で一番人気のバギー。木製バギーは、Aくんが積み木を載せて運んでいる。赤いバギーは、Hくんが人形を載せて坂道を上っている。その様子を遠目で見ていたBくん。そんな時、バギーを押すのに満足したHくんが違うおもちゃのところに移動する。すると、Bくんは片手をつき、ずり這いながらHくんの置きっぱなしにしているバギーのところに近づいていった。しかし、もう少しのところで、違う友だちにバギーを持って行かれ、Bくんは、悔しそうな顔でお母さんのところに戻っていく。 お母さんの横に座ったまま動かなかったBくんの前を、バギーに積み木を載せて運んでいるAくんが通る。Aくんはバギーを器用に操り、坂を上ったり下りたりしたかと思うと、次に段の上にバギーをあげようとした。その様子を近くで見ていたスタッフが、「すごい！」と歓声を上げながら拍手すると、Bくんもつられて手をたたく。その後、Aくんの動きを集中して見ていた。 しばらくすると、赤いバギーを誰も使わなくなったので、

お母さんがBくんのところに持ってきた。  
最初は、フラフラしていたが、次第に、両手足でバランスを取りながらバギーを押し始める。そして、母親の見守るなかスロープ上に挑戦する。  
一度目は、重心が後ろに傾き途中で下がってしまう。二度目は、母親がBくんのお尻を押して手助けをしたため、Bくんは不満そうに顔をしかめた。三度目は、フラフラしながらも自分の足で踏んばり、スロープを上りきり、満足そうに微笑んだ。  
自分でも、スロープを上りきれたことに驚いたのか思わずバギーから手を離し、尻もちをついてしまった。以前なら、泣いて母親に助けを求めているが、すぐに立ち上がりひとりでバギーのところまで歩いて行った。その様子を見ていた母親は、目を見開いて声には出さず、「自分で歩いている」と、喜びをスタッフに伝えた。  
－振り返り－  
今までずり這いをしていたBは、Aと同じ挑戦がしたかったから立って歩いた。Bの挑戦はAの行動によって誘発されたものである。この時、BにとってAは憧れであり、目標となっている。子どもの意欲をどうサポートしていくか。「子ども自身が出来た」と思えるようなサポートの仕方が必要である。

考察

<エピソード1><エピソード2>は、同じ時間に、それぞれのスタッフが記録したものである。Aが自らの課題に挑戦している姿にBが憧れ、Bの遊びを誘発したことが2つのエピソードから分かる。  
まず、Aは、スロープに興味を持ち自ら上ったり下りたりしていた。次に、タイトル①にあるように、バギーに積み木を載せスロープ上りという課題に挑戦したが、思いのほか簡単にできてしまった。そこで、Aは、段差を乗り越えることを次の課題として見つけた。Aには、少し難しい課題だったかもしれないが、そこに、母親のさりげないサポートがあったため、Aの目標達成感が自信に繋がったのだと考える。Bは、Aの行動を見て、「自分もやってみたい」という意欲が芽生え、バギーを持ってスロープを上るという課題に挑戦した。しかし、



母親の「お尻を押す」という行為は、現在のBの発達には不必要なサポートだったため、Bは、課題に再挑戦した。そして、Bの目標達成感自信となり歩く行為に繋がった。このように、記録していくことで、積み木やバギー、そして、スロープや段差という、子どもの学びに必要な環境が見えてくると共に、個人の記録だけでは見えなかったAとBの関係が、スタッフ間でエピソードを共有し検討することで明らかとなった。

②人を介して変化していく

＜エピソード3＞

6月Y日 「いっしょに」 Cちゃん：2歳5か月 Dちゃん：2歳4か月 記録：スタッフF
Cちゃんは、Dちゃんのことが気になるようで、Dちゃんがバギーを押すと、Cちゃんもバギーを押す。Dちゃんがバギーに人形を乗せると、Cちゃんもスヌーピーを乗せ、同じ道を通って散歩。 そして、ふたりが部屋に入ったところで、ボランティアのお姉さんと出会った。Cちゃんが、「あのね、お散歩してるの」と、嬉しそうに話している間に、なんと、Dちゃんの姿が見えなくなってしまった。 慌てて、Cちゃんが、別の部屋へ探しに行くと、絵本棚の間にDちゃんの姿が見えた。安心したように隣へ座るCちゃん。そして、Cちゃんは、「散歩にいつてきたよ」と、ちょっと帰りが遅くなった理由を、Dちゃんに報告していた。 すると、「どこまでお散歩に行ってたの？」と、Dちゃんが聞いてきた。Cちゃんは、困ったように下を向き、「この車でね、行ってきたの」と、答えた。Dちゃんはバギーを触りながら、「へー、これで」と、しばらく考え込んでいた。 しばらくして、手でゴソゴソと何かを触る音がしたのでスタッフが覗き込むと、Dちゃんが、「おにぎり持ってね、お散歩いく？」と、Cちゃんに聞いていた。「にぎって、にぎって」と、折り紙を丸めておにぎりを作っていた。 すると、隣で見ていたCちゃんも、色紙を丸め始めた。「にぎって、にぎって」と、口ずさみながら、色紙を丸めては広げ、また丸めて・・・と、何度も繰り返し、おにぎりを作っていた。

この後、ふたりは別々に遊んでいたが、Dのことが気になるCは、ワミーで遊んでいるDの傍へ、ボランティアのお姉さんと一緒に行った。そして、一緒にワミーで遊び始めた。

＜エピソード4＞

6月Y日 「まねっこ」 Cちゃん：2歳5か月 Dちゃん：2歳4か月 記録：スタッフF
今まで、Dちゃんのことが気になっていたCちゃんだったが、ワミーを自由自在に繋いでいる、ボランティアのお姉さんに興味を持ち始め、観察し始めた。 しばらくすると、お姉さんが使っている色と同じ色のワミーをケースから出し、嬉しそうに話しながら、視線はお姉さんの手元を見つめ、真似ながらワミーをくっつけていった。その姿を見たDちゃんは、ふたりが遊んでいる最中に、ワミー

をケースごと落としてしまった。 その行為に、お姉さんが、「落としちゃった。じゃあ、一緒に集めようか」と、遊びの一場面のような流れのまま拾い上げようとする、Cちゃんも、「一緒にしよう！」と、声を掛け、一緒に集め始めた。 しかし、途中まで集めると、Dちゃんが部屋を出て行ってしまった。どうしたのか？と、様子を見てみると、Dちゃんは、Cちゃんのお母さんを連れて帰ってきた。そして、「来て！見て！」と、Cちゃんが作ったワミーを、自慢げにCちゃんのお母さんに見せていた。この時、「Cちゃん、すごいね」と言う、Dちゃんの眩しが聞こえてきた。 －振り返り－ CにとってDは気になる存在である。Cは、Dを真似ながら様々な課題に挑戦し成長していった。そのCが、お姉さんを真似てワミーで遊び始めると、それまで、主導権がDだったのが、Cへと変わっていった。最初Dは、Cの成長に戸惑っていたが、今までと変わらないCの行為に、Dもまた、Cの成長を素直に喜べるようになり、心の成長がみられた。
--

考察

ふたりが同じ日に支援ルームを利用することは何度かあったが、一緒に遊んでいる姿は、殆ど見たことはなかった。母親の話でも、「幼稚園に通っている兄の送迎で、顔を合わせることはあるが、こんなに長い時間遊んだのは、初めてじゃないかな」ということだった。ふたりとも兄弟は男ばかりという、家族環境も似ており、母親同士も今回のエピソードをきっかけに親しくなった。  
この記録からは、ふたりが気になる存在になったきっかけが見えなかった。その後のエピソード検討会において、別のスタッフから、＜エピソード3＞＜エピソード4＞以前のふたりの行動が語られた。

－スタッフGの語りから－ 6月Y-7日に、ふたりが一緒にいる姿を初めて見ました。Cちゃんにとって、Dは気になる存在みたいです。初めての場所でも、自分の欲しいものを取りに行き積極的遊べるDちゃんの後ろについて、Cちゃんが、同じものを持とうとする姿が何度か見られました。 この日は、同じ種類の買い物かごを持ってついて行っていました。
--

そして、＜エピソード3＞＜エピソード4＞と同日の初めての出会いを＜エピソード5＞として記録していた。

＜エピソード5＞

6月Y日 「同じこと したいんだけど」 Cちゃん：2歳5か月 Dちゃん：2歳4か月 記録：スタッフG
6月Y日の朝も、早く来ていたDちゃんが、げんきルームの入り口近くの椅子に座ってポストボックスで遊んでいる。少し遅れてやってきたCちゃんは、Dちゃんの姿をいち早



く見つけ、寄っていく。Dちゃんは、取られまいと少し身構えて、積木を自分の近くに集める。そして、左手で囲いながら、右手でさっさとボックスに積木を入れていく。

その様子をしばらく、じーっと見ていて、Cちゃんも、棚からポストボックスを出してきて、向かい合わせにちょこんと座る。すぐに遊び始めるというのではなく、ボックスを置いて、またDちゃんの様子を見る。ボックスから積木を出していくものの入れて遊ぶことを楽しむというよりも、Dちゃんが落とした積木の方が気になって、拾おうとする。そして、黙って持っている「返して」とDちゃんに言われる。スタッフが見ていたので、思わず「それ、Cちゃんが拾ってあげたんだよね」というとCちゃんはうなずく。そして、Cちゃんの差し出した積木を受け取る時、「ありがと」とDちゃんは言った。

そのことで、Cちゃんはとても満足そうだった。

－振り返り－

Dちゃんが気になって気になってしかたがないCちゃん。Cちゃんは、お母さんやスタッフのような大人には自分の言いたいことが言えるのに、同じ位の子どもには声をかけられない。そばにくっついて行ったり、同じことをするのが精いっぱい。それでも同じ年の女の子ということで、今のCちゃんにとっては、Dちゃんは注目度ナンバーワンの存在である。

### 考察

スタッフGの語りから、Cは積極的に行動するDに憧れ、同じ行動をし始めたことが分かる。＜エピソード5＞では、気になるCのアクションに気づかないDと、それでも、アクションを起こし続けるCの行動が記録されている。スタッフのサポートもあり、最後に、憧れのDからお礼を言われ嬉しかったことで、Cにとって、さらにDは、憧れの存在になっていった。

このような、一連の様子から、C、Dがかかわり、ふたりで一緒に遊ぶ姿が生まれてきたことがわかる。

### ＜エピソード6＞

6月2日「私もバケツ持てみたいの」

Cちゃん：2歳5か月 Eちゃん：1歳9か月 記録：スタッフG

砂場では、いつものようにCちゃんは、お母さんが作った山を登ったり降りたりする遊びを楽しんでいた。

後から来たEちゃんは、まだ砂場の縁の所に座って、足の上に砂をかけたり、スコップで砂をすくったりして遊び始めた。でも、Eちゃんは、楽しそうに目の前を行ったり来たりしているCちゃんを見ている。

今日のCちゃんはスコップで砂をすくってバケツに入れ、「重たい」と言いながら腕にかけて砂山を登ったり降りたりしていた。

すると、Eちゃんが、自分も目の前にあったバケツを持ってお母さんにつき出して、「Eも」と言う。「ああ、Eもしたいの」と、お母さんが言うと、うなづいて、自分の使っていたスコップやゼリー型を入れて手を通そうとする。引っかかってうまく持てず、お母さんが「こうしたら持てるよ」とゼリー型を小さい型に変えてやる。それを持って立ち上がるが、一人では砂の上を歩くことができず、「あんあん」とお母さん

に手をつないでもらって砂の上を歩くことができた。

「一緒だね」とCちゃんのお母さんも声をかけてくれる。「こっちまで行ってみる」とCちゃんは、砂場の端から端まで歩く。その後をついてEちゃんも、砂場の端から端まで歩く。

だんだん慣れて、今度はEちゃんが前を行き、後ろからCちゃんがついていくということもあった。手には、同じようにバケツをかけている。

－振り返り－

砂の上を歩くことへの抵抗があったEちゃんだったが、Cちゃんのバケツを腕にかけて砂の山を登ったり降りたりする遊びが楽しそうに見えたのだろう。それで、真似をしたくなった。同じバケツがあり、真似することを「すごい」と言ってくれるお母さん達に支えられ、真似し真似される遊びが、楽しめるようになっていくのだろう。

### 考察

この時期の子どもは、他者の動きをよく見ている。そして、自分もやってみようとして真似ることから、いろいろな経験を経て、はじめての砂場でも裸足で歩けるようになってくる。同年齢の子どもが、同じ場所で活動することの意義がみられる。エピソードを収集していく中で、このような事例が数多く見られた。

### 4. 総合考察

＜エピソード1＞から＜エピソード6＞までの6事例をまとめてみていくと、＜エピソード1＞と＜エピソード2＞では、「置きっぱなしにしているバギーのところに近づいていった。しかし、もう少しのところで、違う友だちにバギーを持って行かれ、Bくんは、悔しそうな顔でお母さんのところに戻っていく。」とあるように、Bの目的は、最初「バギー」で遊ぶことだった。それが、＜エピソード2＞の、「Aくんの動きを集中して見ていた」とあるように、興味の対象が「バギー」という物から、「Aくん」という人に変化していったことが窺える。この2事例では、対象が、「物から人」へ移り、Aの挑戦にBも誘発され、「スロープ」「段差」に挑戦した。これらのことから、「物を介して人が変化していく」ことが明らかとなった。また、この場所に、移動できる「バギー」や「スロープ」「段差」がなければ、Aが挑戦する機会もなく、Bの遊びの誘発も見られなかったということも考えられる。

次に、＜エピソード3＞から＜エピソード6＞では、＜エピソード5＞で、CにとってDが気になる存在になったことがわかり、＜エピソード3＞に、「Dちゃんがバギーを押すと、Cちゃんもバギーを押す。Dちゃんがバギーに人形を乗せると、Cちゃんもスヌーピーを乗せ、同じ道を通って散歩。」とあるように、CはDに憧れ、同じ行動をとることで満足していた。しかし、＜エピソード4＞で、Cの意識がボランテアのお姉さんに

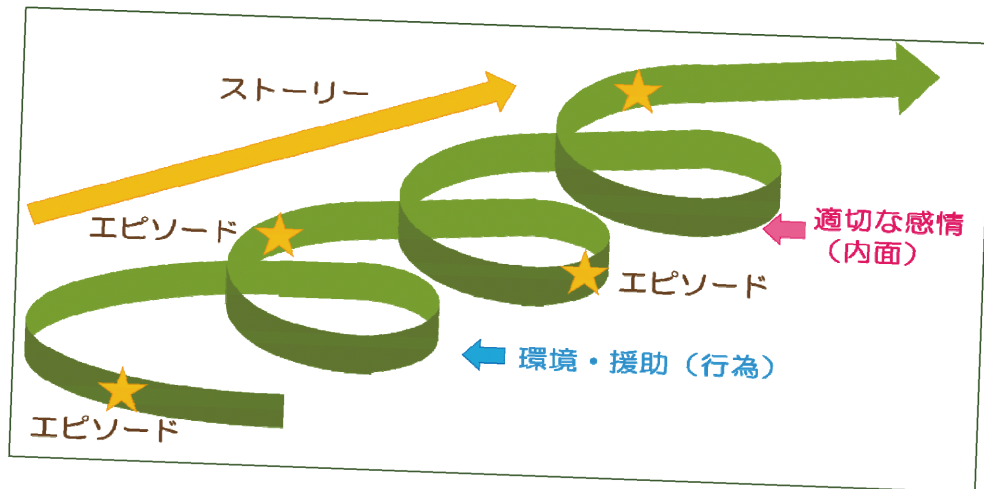


図2：記録の意味（試案）

向き、ワミーで遊び始めてから、遊びの主導権は、D から C へと変化していった。その背景には、C の意識の変化だけではなく、＜エピソード4＞に、『「Cちゃん、すごいね」と言う、Dちゃんの眩きが聞こえてきた。」とあるように、DのCに対する意識の変化もみられた。これらのことから、「人を介して人が変化していく」ことが明らかとなった。

さらに、＜エピソード6＞では、CがEに憧れてもらえる存在となることがわかる。同年齢の子の真似をしていたCが、今度は、真似てもらえる存在になっている。このように、エピソードとエピソードをつなぐことで、子ども同士の関係を読み解くことが出来、それぞれの「遊びを通した学び」の本質が明らかとなった。

## 5. おわりに

エピソード記録を持ち寄り、話し合うことで、情報の共有が出来るだけでなく、＜エピソード3＞＜エピソード4＞のように、子どもの成長を時系列でみることが出来た。また、＜エピソード1＞と＜エピソード2＞や＜エピソード3＞＜エピソード4＞と＜エピソード5＞のように、スタッフの記録をつなぐことで、1歳半から2歳の子どもは、同じ年齢の子どもの動きをよく見ており、真似ることから遊びの経験を深めていることがわかり、子どもの「遊びを通した学び」の本質が見えてきた。このように、子ども理解を深めることは、スタッフの質の向上にもつながる。さらに、＜エピソード1＞と＜エピソード2＞の2事例のように、「物を介して人が変化していく」ことや、＜エピソード3＞＜エピソード4＞＜エピソード5＞＜エピソード6＞の4事例のように、「人を介して人が変化していく」ことから、子どもの学びに必要な物的環境・人的環境への配慮や工夫が出来るようになった。これらのことが、子育て支援ルームにお

ける記録の効果ではないかと考える。

このことを、「記録の意味（試案）」（図2参照）としてまとめた。

図2は、子どもが成長していく過程を表している。1つのエピソードに環境を工夫したり、援助することで、次のエピソードが生まれる。その後も感情を育み、別のエピソードが生まれる。それぞれのエピソードを繋いでいくことで、1つのストーリーが生まれる。また、エピソードの書き手は1人ではなく、その子に関わった人が書いた記録を繋ぎ合わせることで、ストーリーとなる。ここに、記録の新たな意味があると考え、エピソードからストーリーへとつないでいく記録を、子育て支援ルーム「GENKi」のオリジナルとして、「GENKi プレイストーリー」と名付け、収集を続けている。

今後は、スタッフが記録したエピソードや、保護者の感想をポートフォリオに入れ、その子だけの記録として綴っていくことを考えている。また、ポートフォリオの作成は、保護者との協働作業になると考えられ、親と子どもの成長を共有化するツールになるであろう。

エピソードからストーリーへの軌跡をさらに詳細に検討して、子育て支援員の資質を向上するため、効果的なツールとしての記録について研究を進めていきたい。

## 註

- 1) 平成26年8月24日から平成26年8月30日の期間に、ニュージーランドのオークランド市及びネイピア市にある、Royal Oak Childcare Centre, The Nest Private Kindergarten, Hillsborough Playcentre, Eden-Epsom Playcentre, Balmoral Playcentre, Te Kohanga Reo o Kakariki の、計6か所の施設を視察した。

## 引用文献

- 1) 橋川喜美代 (2012) 「テ・ファリキとラーニング・ストーリーから実践記録を読み解く」 鳴門教育大学研究紀要 第27巻 p.22
- 2) 大宮勇雄 (2006) 『保育の質を高める：21世紀の保育観・保育条件・専門性』 ひとなる書房 p.40
- 3) 兵庫県教育委員会『平成24年度幼稚園教育のあゆみー「元気兵庫へ ころろ豊かな人づくり」をめざしてー第45集』 p.7

※本研究は、平成26年5月、日本保育学会 第68回大会（椙山女学園大学）に、ポスター発表したものを一部含めている。